慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	凍る時間とよみがえる女 : チャイルドの「ヒルダ・シルフヴァーリング」に見る子殺し、冷凍睡眠、インセスト
Sub Title	In a sleep as cold as ice : infanticide, suspended animation and kinship in Lydia Maria Child's 'Hilda Silfverling'
Author	大串, 尚代(Ōgushi, Hisayo)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2020
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.119, No.1 (2020. 12) ,p.83- 91
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	巽孝之教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01190001-0083

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

凍る時間とよみがえる女
── チャイルドの「ヒルダ・シルフヴァーリング」に見る子殺し、冷凍睡眠、インセスト

大串　尚代

19世紀において、「よみがえるヒロイン」を描く再生譚が、ある一定のサブジャンルを構成していた可能性を、トマス・マボットは『ポー作品集』において示している。ポーの「美女再生譚」のひとつである “Morella” は、1831年に発表されたデイヴィッド・グラスフォール・ベルの「死せる娘」のプロットをほぼ踏襲しているとマボットは指摘する（222-25）。死んだ女性とその再生のモチーフはこのほかにも “Ligeia,” “Eleonora,” あるいは “The Fall of the House of Usher” などにも見ることができる。

そのポー自身が編集する雑誌 *Southern Literary Messenger* において、彼が絶賛したロマンス作品がある。*Philothea* と題されたその物語を執筆したのは、人種差別に反対し、奴隷解放を主張するリディア・マリア・チャイルド（1802-80）だった。古代アテネを舞台にした『フィロシア』には、いったんは死んだかと思われたものの、息を吹き返す登場人物が登場し、ポーはまさにこの「再生」の場面をその書評で詳述している。『フィロシア』において扱われる再生は、呪術や超現実的な力によってもたらされるものであり、若い頃からスウェーデンボルグ思想に興味を抱いていたチャイルドが（Child, *Selected Letters* 2）、「魂の永遠性」を信じ神体と魂の再融合を描いたことは、驚くにはあたらないと思われよう。

しかしながら、チャイルドが「再生」を描いたもうひとつの短編小説は、『フィロシア』とは趣を異にしている。チャイルドが “Hilda Silfverling” という奇妙な小説を *Columbian Lady's and Gentleman's Magazine* に発表したのは1845年のことだった。本作は、18世紀にスウェーデンの孤児ヒルダ・ギレンロフが、ストックホルムに女中として働きに出るところから始まる。彼女は都会でマグヌスと

いう青年と出会い、恋に落ちる。しかし彼が乗った船が遭難し、その後彼の消息は不明となってしまう。一方でマグヌスの帰りを待っていたヒルダは子どもを身ごもっていた。ヒルダがひとりで子供を出産し、どうすべきか途方にくれていたとき、ヴィリカと名乗る女性が生まれたばかりの乳児を引き取り、故郷であるノルウェーの村で育てることを提案してくれた。しかし、その直後に赤子の水死体が発見されたとき、子供殺しの嫌疑がヒルダにかけられてしまうことになった。必死の弁明もむなしく、彼女は死刑判決を受けてしまう。ちょうどその頃、体温を下げることによって生命体を生きたまま保存する方法を研究していた科学者が、死刑を待つヒルダを実験台に、冷凍睡眠の人体実験を行うことを許可される。ヒルダは100年の眠りにつき、目覚めたときの世界は19世紀 ── 1840年 ── になっていた。彼女は名前を「ヒルダ・シルフヴァーリング」と変え、誰も自分を知らない村で暮らす、という物語である。

ここで興味深いのは、「ヒルダ・シルフヴァーリング」におけるヒロインであるヒルダが死刑を免れ、ほぼ100年の時を生きながらえているということ、またそれは当時の科学技術によるものであるとチャイルドが描いている点である。結果としてヒルダは、新たなアイデンティティを手に入れ、未婚のままの出産や子殺しの容疑といった社会的なスティグマからは解放された状態で、なにもなかったかのように牧歌的な村で、残りの人生を過ごすことになる。このことからCarol Colatrellaは、女性を救うテクノロジーが描かれている作品としてこの「ヒルダ・シルフヴァーリング」を分析している（“Representing Female-Friendly Science and Technology in Fiction and Film” 23）。本論では、コラトレッラの議論を踏まえつつ、冷凍睡眠、現在では低温物理学(cryogenics）とよばれるテクノロジーと、19世紀の社会規範および性差の問題との関連性について論じていく。

1.「堕落した女」とは誰か

チャイルドは、誘惑と女性のスティグマをテーマにした作品を折に触れて執筆している。インディアンの女性が白人男性に捨てられる短編小説“A Legend of the Falls of St. Anthony”（1846）、また、結婚を約束していた男性が、実は他の女性と結婚していたというエピソードを含む小説*A Romance of the Republic*（1867）などがすぐに思いつくだろう。「ヒルダ・ヴァーリング」と同じく、短編集*Fact*

and Fiction（1846）に収録されている“Elizabeth Wilson”は、幼い頃に母親を亡くしたエリザベスが未婚の状態で子どもを身ごもるが、相手の男性は小金持ちの未亡人と結婚し、エリザベスは死産を経験するという物語である。さらに数年後、彼女は再び妊娠してしまう。父親の名前を決してあかさないまま双子を産み落としたエリザベスは、精神を病み、子供を殺すという凶行に及んでしまう。恩赦を求めるエリザベスの兄の訴えも届かず、彼女は牢獄に入れられ、死刑を余儀なくされる。

ヒルダもまた、未婚のまま出産している。このことは、本文中で“all her wretchedness”とあらわされており（375）、wretchedがもともとはoutcastつまり追放されたもの、捨てられたものという意味を表すことを考えると、「堕落した女性」とその結果としての「子殺し」とは、男性の不誠実さゆえの女性の社会的失墜が前景化されていることがわかる。チャイルドは娯楽小説として親しまれている誘惑小説の枠組みで、社会改革の意識を高めようとしたとも考えられよう。「ヒルダ・シルフヴァーリング」は、家父長制の中で「堕落した女性」というレッテルを貼られる女性を中心に据えることで、社会改革問題を扱った作品という位置づけもなされている。たとえば、こうした女性の物語執筆のきっかけは、1840年代初頭にチャイルドが編集長をつとめた反奴隷制新聞*National Anti-Slave Standard*に連載していたコラム*Letters from New-York*にあると、HibbardとParryは指摘している（347）。この『ニューヨークからの手紙』は、チャイルドが実際に目にした都会の生活事情をスケッチ風に述べた作品であるが、彼女はニューヨークで見られる街娼（いわゆる娼婦）たちに関して、男性によって犯罪者として投獄され、その当の男性たちは立派な家に住み、自分たちの罪を一掃させるための条例を可決させている、と皮肉っている（第29信）。この意味で堕落したとされる女性による「子殺し」は、家父長制の社会におけるさまざまな矛盾を表象するものとしてとらえることができるだろう。

2. 命の一時中断

チャイルドが「堕落した女性」とされる女性に感心を寄せていたことは、1843年に当時ニューヨークで大きな話題になっていた、アメリア・ノーマンという女性の裁判に足を運んでいたことからも推察される（Hibbard and Parry 329-

30)。その裁判とは、女中として仕えていた主人に誘惑され、子どもを身ごもったあげくに捨てられ、売春婦に身をやつしたアメリアが、生活費をその男性に無心したところすげなく断られたばかりか、その男性が警察にアメリアの売春行為を密告しに行ったことを知り、その男性をナイフで刺し殺そうとした、という事件である。チャイルドは被告を支援する女性たちを集めていたことから(Hibbard and Perry 329)、男性による誘惑とその結果として女性が受ける社会的批難を問題視していたことがうかがわれる。

「ヒルダ・シルフヴァーリング」において、ヒルダは子殺しの濡れ衣を着せられ、いわば冤罪での死刑宣告を受けることになる。ここで登場するのが化学者——"a very leaned chemist"——である(375)。彼はヒルダがあまりに若いので、同情の余地があると考え、一時的に彼女の生命を止め(suspended animation)、100年後に目を覚まさせることを告げる。この化学者は人工的に冷気を造り出す装置を発明し、それによって生き物の生命活動を一時的に低下させ、どれほどの期間でも保存することができる、と説明される(375)。化学者の研究室には巨大な熊が手を重ねて横たわっており、その姿は14世紀の騎士のように敬虔に見えていた。この研究室では、熊も人間も"Might makes right"という格言にもとに平等に扱われている(376)。このように、熊も人間(マン)も科学の力のもとにおいて等価な存在であるとされ、この実験室では、彼女が熊と同様に生命の一時中断状態(suspend animation)に入ることにより、動物と同列の存在として留め置かれることになる。ここでは化学者がヒルダに睡眠薬を飲ませ、最後にガスのようなものを装置から噴出させ、いそいで部屋を出たということ以外に具体的な装置の説明はない。その後100年経った時、彼女は目を覚まし、新しい人生を「小さくて素朴な可愛らしい村」で過ごすことになる(381)。

ここで疑問なのは、この作品が書かれていた時代に、このsuspended animationはどれほど現実的な——あるいは実現不可能な——科学技術だったのか、ということである。Robert Mitchellによれば、suspended animationがイギリスで注目を集めるようになったのは、Humane Societyが1774年に創設されたことがきっかけだったという(109)。そもそもこの研究は、冷たい川などに落ちてしまい、一時的に生命機能が低下した状態にある人間、いわばトランス状態にある人間をどのように蘇生させるのかを明らかにしようとしたものだった。この研究にいそしんだのがJohn Hunterという科学者である。ミッチェルによれば、彼は動植

物の実験を通じて、「血流や呼吸、認識などの生命活動（actions of life）が極度の寒さによってすべて一時停止しても、動植物は自らが置かれた環境に対応し続ける」ことを確認したという（110）。 これを人間に応用したハンターは、それまで寒さは人命にとって危険であるとされていた考えを覆し、「並外れた寒さは死をもたらすことなく、生命の有機的活動を一時停止させる」ことを発見した。ハンターはこれを “Simple life” の状態と呼び、生命の新たな概念を見出したのである（Mitchell 110）。ミッチェルは、この発見は、生きる時間を変えることであり、「生と死、夢と覚醒、過去と未来が混淆する」思考が生まれたと論じている（111）。さらに、この思考は18世紀末の急激な都市化、そしてそれにともなう社会変化に対抗するような時間観、つまり「半ば凍った時間（nearly frozen）」――宙づりになった時間――というものが必要とされることが背景にあったことをミッチェルは示唆している（112）。「ヒルダ・シルフヴァーリング」では、犯罪者とみなされた女性が、simple lifeの状態に陥った「凍った時間」を経て、目覚めたときにはまさに文字通り素朴な村でのsimple lifeを送るユートピア的な物語とも解釈できる。その意味では、先述のコラトレッタが言うとおり、「女性に優しい科学技術」が描かれた作品と解釈することも可能だろう。

3. 冷えていく世界

しかし、ここでもうひとつの科学技術にもふれておく必要がある。チャイルドがこの短編作品を書いた19世紀の前半は、ものを冷やす装置、すなわち現在の冷蔵庫にあたるものが開発された時代でもあった。Susanne Freidbergによると、ニューイングランドで切り出した天然氷を輸送するビジネスは1820年代ごろまでに、ボストンのFrederic Tudorが軌道に乗せており、アメリカ国内はもとより、リオデジャネイロにまで輸送していた。当時氷は、おもに木製のアイスボックスに入れて食べ物を保存するために用いられていた（20）。アイスボックスを持つことができたのは富裕層の人々だったが、しかし1838年のニューヨーク・ミラー紙では、アイスボックスが人々の必需品であると宣伝されてもいた（Friedberg 23）。

こうした天然の氷の販売と同時に、人工的に氷を造る装置、すなわち人工冷却装置が開発されていた。スコットランドでは1810年に空気圧縮機を用いた冷

凍機によって、世界に先駆けて氷が作られていたが、アメリカでは発明家Jacob Perkinsが、1834年に蒸気圧縮冷凍機を発明し、イギリスで特許を取得している。また、1844年には、フロリダの海兵隊病院の医師であったJohn Gorrieが、「発熱した患者の体温を下げるためにいつでも氷が確保出来るよう」冷凍機の必要性を説いた（Sherlock 91）。ゴリーはさらに、暑さは身体に悪いので、街全体を冷却できる装置、いまでいうエアコンを開発しようとしていた。こうした一連の開発は、いわば現在の冷蔵庫、つまり食品の保存に用いられるものへと応用された。またコラトレッラが指摘するように、そうした家庭に用いられる技術が、女性のdomesticな仕事の質を変え、そして男女の関係を変えていったのである（コラトレッラ 23）。

4. よみがえる冷たい女

冷却装置の中で凍った時間を体験したヒルダは、実験室の動物と同列の置かれていたことになるが、さらには冷蔵庫の中身である食べ物とも同化する。完全に新鮮なわけではないが、完全に腐っているわけでもない —— 生死の間にある曖昧な存在になるヒルダは、まさに命を宙づりにされていることになる。長い眠りから解き放たれた後の彼女は、フィヨルドのあるノルウェーの村で暮らす。つまり寒冷地帯でsimple lifeを送るヒルダは、都会とは違う時間の流れ —— 半ば凍った時間 —— の中で生活する。凍らせる技術は、研究室の中から生まれ、さらにそれがdomesticな場所に繋がることで、女性の存在を変えていく装置にもなっていく。すなわち、「堕落した女性」とされる人々を解放し、また食品保存の煩わしさから女性を解放するのである。

しかし彼女の物語はここでは終わらない。先述のとおり、100年後に目覚めたヒルダは、名をヒルダ・シルフヴァーリングと変え、たまたま出会った親切な人のつてをたどり、ノルウェーの人里離れた村で暮らすことになる。そこでヒルダはマグヌスにうりふたつの男性、アレリクに出会う。アレリクもまたヒルダに惹かれる。あるとき、アレリクが持っていた笛に見覚えがあったヒルダは、その笛の出所を尋ねると、アレリクは自分の祖母が持っていたものだと答える。アレリクの祖母には老女が付き添っていたが、亡くなってしまったという。その老女の名がヴィリカであることを知ったヒルダは、アレリクの祖母が自分の産み落とし

た子どもであり、自分の曾孫にあたるのがアレリクであるとわかり、愕然とする。ヒルダは自分がアレリクの曾祖母であることを告白するものの、アレリクは、まったく気にすることもなく、最終的にふたりは結婚式を迎えたところで物語は幕を閉じる。

5. 時間を超えた出会い

ヒルダが100年の時間を超えて生き延びた結果として、彼女は自分の曾孫と出会い、そして恋に落ちる。Suspended animationを可能にした冷凍・冷蔵保存のテクノロジーは、simple lifeを送るヒルダの親族関係（kinship）に大きな影響をもたらす。この物語において、ヒルダとアレリクの時を越えた関係は近親婚ということになり、近親姦（インセスト）を想起させるものになる。そもそも「ヒルダ・シルフヴァーリング」は、誘惑小説のジャンルに見られる社会的規範から外れた男女関係を描いた作品だとするならば、同じく規範外となる近親姦のモチーフは決して予想外のものではない。

小説における近親姦は、作者がインセストを肯定しているかどうかという問題よりも、近親姦が持つ理性や法を超えたところにある「秩序を変えてしまう、象徴的な原動力を備えている」ところに新田啓子は意義を見出している（198）。それをふまえるならば、ここでのヒルダとアレリクの関係は、本来であれば世代的にまったく関わり合うことのない曾祖母と曾孫が、テクノロジーの進歩によって恋人となり、家族のかたちと社会の秩序を根本から覆す危険をはらむ。だがこれは同時に、社会によって堕落の烙印を押された女性が、彼女を追いやった社会制度への復讐とも捉えることができよう。Karen Sanchez-Epplerは、19世紀半ばのアメリカ小説の中では、禁酒文学にインセストが書き込まれており、中でも圧倒的に多いのが父娘関係であると指摘している（162）。チャイルドが描いたのは、しかし、シンボリックな母息子関係でもなく、父娘でもなく、先述した短編「エリザベス・ウィルソン」で描かれたような兄妹関係でもなく、曾祖母と曾孫である。この時を超えた親族関係がもたらす威力は、親族の秩序を完膚なきまでに破壊するものにほかならない。

「ヒルダ・シルフヴァーリング」においては、興味深いことに、アレリクはヒルダからの告白を受け止めつつも、ヒルダの心配を笑い飛ばし、自分とヒルダの

関係が――たとえ曾祖母と曾孫であっても――問題がないことを繰り返し述べる。たとえば、エジプト人は3000年ものあいだ魂は消えないと信じていたから、いろいろなものに生まれ変わる、自分もライオンやナイティンゲールだったかも知れない。あるいはギリシャ神話において女性が植物や石に変えられてしまうメタモルフォーゼについて話し始める（392-30）。ここでアレリクは、魂は不変であり、生まれ変わって異なる肉体に宿ることはあるというレトリックを用い、ヒルダを説得しようとする。しかし、魂も肉体も100年前のままであるヒルダの場合はこれにあてはまらない。

そこで最終的にアレリクは、人間の身体も魂も7年に一度生まれ変わるから、ヒルダは100年前のヒルダではない、と主張する。ここでのアレリクの見解は主体の同一性の問題を問うものでありながら、同時にアレリクから人間と他のもの、動物や植物、無機物などとの境界をゆらがせるような発言が引き出されている。すなわち、家父長的家族制度が崩れたとき、それと同時に人間の定義であったものが転覆され、そのときはじめてヒルダは自由になる。そこで初めてヒルダはアレリクのプロポーズを受け入れる。そこでヒルダは「ああ、こうしてあなたの胸の上で眠れるなんて、熊や鰐と100年も一緒にいたことが十分報われたわ」（395）とつぶやくのである。

冷凍睡眠という科学の力をもちいた「ヒルダ・シルフヴァーリング」は、現在でいえばサイエンス・フィクションと分類される作品だが、しかしこの時代に冷蔵や冷凍による保存が発展していたことを考えるならば、チャイルドの破天荒な妄想のみによる作品とはいえない。家庭というドメスティックな場を助ける保存技術と、半ば凍った時間による宙づりの状態を保つ冷凍睡眠は、チャイルドの中で家父長制秩序を転覆させる可能性を想起させるものだったのではないか。家庭の中に技術の進歩がもたらされたとき、それは家族や家庭の位置づけをも変えていく可能性をはらんでいることを、このチャイルドの短編は物語っている。

引用参考文献

Briley, Goerge C. “A History of Refrigeration.” *ASHRAE Journal* vol. 46, no. 11, 2004, pp. 531-34.
Carcher, Carolyn L. *The First Woman in the Republic: A Cultural Biography of Lydia Maria Child*.

Duke UP, 1994.

Chapais, Bernard. *Primeval Kinship: How Pair-Bonding Gave Birth to Human Society*. Harvard UP, 2008.

Child, Lydia Maria. *Fact and Fiction*. 1846. New York: James Miller, 1867.

---. "Hilda Silfverling." *A Lydia Maria Child Reader*. Ed. Carolyn L. Karcher. Duke UP, 1997. pp. 374-95

---. *Letters from New York*. 1843. New York: C. S. Francis, 1845.

Colatrella, Carol. "Science Fiction in the Information Age." *American Literary History* vol. 11, no. 3, 1999, pp. 554-65.

---. "Representing Female-Friendly Science and Technology in Fiction and Film." *Proceedings of the IEEE Society on Social Implication of Technology, Symposium on Women and Technology*. pp. 29-31 July 1999, New Brunswick.

Cox, Robert S. *Body and Soul: A Sympathetic History of American Spiritualism*. U of Virginia P, 2003.

F. J. Ferris for the Heritage Group of the CIBSE. *Perkins Family*. http://www.hevac-heritage.org/victorian_engineers/perkins/perkins.htm

Freidberg, Susanne. *Fresh: A Perishable History*. Harvard-Belknap, 2007. Kindle edition.

Hibbard, Andrea L., and John T. Parry. "Law Seduction, and the Sentimental Heroine: The Case of Amelia Norman." *American Literature* vol. 78, no. 2, 2006, pp. 325-55.

Mabbott, Thomas O., eds. *Collected Works of Edgar Allan Poe*. vol. 2. Belknap-Harvard UP, 1987.

Mitchell, Robert. "Suspended Animation, Slow Time, and the Poetics of Trance." *PMLA* vol.126, no. 1, 2011, pp. 107-22.

Nagengast, Bernard. "Electric Refrigerators Vital Contribution to Households." *ASHRAE Journal* vol. 46, no. 11, 2004, pp. 511-19.

[Poe, Edgar Allan.] Rev. of *Philothea*. *Southern Literary Messenger*, Sep. 1836, pp. 659-62.

Sanchez-Eppler, Karen. "Temperance in the Bed of a Child: Incest and Social Order in Nineteenth-Century America." *Incest and the Literary Imagination*. Ed. by Elizabeth Barnes. UP of Florida, 2002. pp. 156-88.

Sherlock, V. M. *The Fever Man: A Biography of Dr. John Gorrie*. V. M. Sherlock, 1982.

新田啓子『アメリカ文学のカルトグラフィ ── 批評による認知地図の試み』研究社、2012年。